まだ君は目覚めない

安芸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まだ君は目覚めない

【Ｎコード】
Ｎ６４９６Ｔ

【作者名】
安芸

【あらすじ】
甘味茶屋パンダタ　開店です！
店主は顔と頭がよくてひとが悪い。看板娘はかわいくて単純一途。取り巻きは過保護で過激な父兄と女装趣味の怪しい常連客。徒党を組んで暗躍する少年と、そして、照れ屋でおとなしい年下男のふりをした、無慈悲な男。のんきな母と小さいパンダも一緒です。
基本アットホームコメディ、たまにラブコメ、時々シリアス。
ようこそ、いらっしゃいませ！

見てはいけない顔（前書き）

主人公は十六歳の元気でかわいい女の子、マシバ。

サイちゃん、大好きっ子です。

『家族命』な父に『妹に手を出すな』な俺様兄と『まあまあ』が口癖な母。

マシバを陰から支える幼馴染やふらふらしている女装趣味のお客さん。

そして、サイに拾われた正体不明の男。プラス、パンダつき。

などなど。他にも騒々しい面子で続きます。

どうぞよろしくお願いいたします！

見てはいけない顔

「サイちゃん、お店に出す夏の新作お菓子決まった？」

マシバはここ数日気にかかって仕方のないことを訊いた。

「まあね」

サイの素っ気ない返事。サイは手に持っていた木の細工の円形おもちゃを、腕を振り上げて遠方に投げる。

これに素早く反応したのはパンダタ。「たあー」とひと声鳴いて、おもちゃを拾うため、とてて、と短い脚で走り出す。無防備なお尻がかわいい小さな白黒パンダで、額に星型のブチがある。サイが竹林から拾ってきて以来、大事な家族の一員だ。

マシバはサイの腕にぺと、とくっついた。

「どんなの？　教えて」

サイとマシバが『甘味茶屋パンダタ』をはじめて一年と少しが経った。

サイは料理担当、マシバは接客担当、ちなみに経理を担当しているのは母だ。

「内緒」

にやっとサイが笑う。いつもながらちょっぴり意地悪だ。だがマシバも負けてはいない。

「マシバが味見してあげる」
「と言うのは建前で、本当は『一番乗り』したいだけだろう？」

図星を言いあてられ、マシバは開き直った。

「そうだよ。サイちゃんのお菓子はぜーんぶマシバが『一番乗り』だもん。絶対だもん」
「はいはい」
「絶対絶対だからね。他のひとに味見させちゃだめだからね」
「わかった、わかった」

くしゃ、と頭を撫ぜられる。マシバは「えへ」と笑ってサイの腕にいっそう擦り寄った。

「サイちゃん、大好き」
「たあー」

戻って来たパンダタが絶妙の合いの手を挟む。拾ってきたおもちゃが足元に転がっている。

「パンダタもサイちゃん好きだって」

サイが屈託なく笑う。マシバはその顔を見て嬉しくなる。

「サイちゃん、サイちゃん」
「こら、あんまりくっつくと転ぶだろう。ちゃんと普通に歩くんだ」
「いやですよーだ。朝の散歩はサイちゃんを独り占めできる貴重な時間なんだから。ね、パンダタ？」

マシバは土手の先をとてとて短い足で走る小さな白黒パンダに声をかけた。呼びかけてから数秒後に思いついたように振り返り「たあー」と鳴く姿は鈍くて愛らしい。

「いつも店で一緒にいるじゃないか」

「それとこれとは別だもん」

叱られてもマシバはへこたれず、そのままサイの左腕にぺったりと身を寄せていた。サイに振りほどく気配はない。いつもそうしてマシバのわがままを許してくれる。

マシバはちらっと朝靄にかすむサイの横顔を見た。きれいだな、とつくづく自慢に思う。短い黒髪、一重瞼で切れ長の黒い瞳、自分のことには無頓着だがそれでも整っている容貌。

白い筒袖の上衣を着て、ゆったりとした褌（はかま）を穿き、一門の印を刺繍した帯を締め、膝下に足結（あゆい）を施し、皮の履物を履いて、左手首にはマシバが贈った手珠（てだま）をつけている。上衣の胸紐は新しいものに取り換えたばかりだ。

マシバもサイとほぼ同じ恰好をしているのに、サイの方が様になるのはどうしてなのか、いつも不思議でならない。なんてことはない質素な衣装も、サイが着れば、なんでもとびきり似合うから不思議だ。

朝の清潔な薫りの風が吹く。竹笹がさわさわと葉ずれの音を響かせる。

マシバは胸一杯に真新しい空気を吸い込む。気持ちがいい。

山裾にあるマシバ達がくらす集落は、宣誓院や英霊王院のある都に続く大街道沿いより若干内奥に逸れただけのところにあるため、常にひとや物資の流れは絶えない。傍に割合大きな川も流れているため水上の流通も盛んだ。

だがひとの行き来がはじまるにはまだ早い時間だ。

サイはパンダタを連れて毎朝川辺の土手沿いを往復する。マシバ

はそれにくっついていくことが日課になっていた。
山は若々しい緑に色づき、近辺もすっかり初夏の訪れを感じさせる景色だ。

「ひとが倒れている」

マシバの耳にその呟きが聞えたときには、既にサイは駆け出していた。
素早い動作で土手を斜めに下り、草むらを掻きわけて川べりに辿り着く。サイが慎重に近づき、身を屈めて片膝をついた。上からではよく見えない。サイのものではない、足だけが見える。

「サイちゃん！」

マシバは叫び、なんだか不安になって傍に行こうとした。だがすぐに「来るんじゃない」と厳しい声で止められた。

「でも」
「見てはだめだ。だから来るな。郷（ごう）に戻って、男手を二、三人連れて来て。それから今日は店を休むから、休業札を下げて、あと医者の手配も頼む」
「うん、わかった」
「あ、それと」
「なに？」
「その領巾（ひれ）を貸してくれないか」

マシバは肩から腕にかけて巻いているそれを取った。女の子が十四歳以上になったことを証明するもので、まだ長さは短いが、マシバは二年前より外出時には必ず領巾（ひれ）を身につけている。

「投げるよ」

マシバは土手の上からそれを投げた。領巾(ひれ)がふわりと風に舞う。しかしサイの手元までは届かない。そこへパンダタが「たあ」と、鳴いて土手から斜面に身を躍らせ、草の上に落ちた領巾(ひれ)を口に咥えてサイの元へと運んだ。

マシバは身を翻した。サイの頼まれごとを口の中で復唱する。

胸がドキドキした。

見てはだめだと、サイは言った。つまり見てはいけない顔なのだ。見てはいけないことが一目でわかる顔――そんな『顔』は限られている。

そしてその『顔』を既にサイは見てしまった。

不安が募る。なにか悪いことにならなければいいけど、とマシバは祈るような気持ちで集落――一般には『郷』と呼ばれる巨大な集合住宅へと駆け込んだ。

見てはいけない顔（後書き）

久々の新作です。

起承転結、四章仕立て、原稿用紙３５０枚くらいをめどに展開します。

順調に連載できればいいですが、不定期更新の可能性も大。

いつも通りにぎやか時折シリアスに進めたいな、と。お付き合いいただければさいわいです。

感想・苦情・誤字脱字のツッコミなどもお待ちしております。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

一　郷の中（前書き）

まずは、シュリの登場です

一　郷の中

「誰か助けて！」

マシバは開口一番叫んだ。

マシバが一族で暮らす『郷』はほぼ真円の形をしているため『円郷』とも言われる。

防衛のため高く厚い外壁を築いた建物は要塞らしく、堅固で、どっしりしていた。石材の基礎の上に、木造家屋が建っている。外壁は土造りで、黒い屋根瓦が覆っていた。

入口は一ヶ所のみ。建物に比べてだいぶ小さく、上部には『九』の文字、これは『郷』の番号を示している。門を潜ると玄関があり、そこを抜けると中庭だ。

「なんだ、どうした」

「まかせろ、なにをすればいい」

と、すべての作業を放り出してどっと男達が集まる。

一族の絆は強く、深く、厚い。困ったときは皆で助け合うのが普通なのだ。

マシバが男手を必要としている事情を説明すると、体格のいい若い男二人が名乗りを上げ、念のため武装した護衛士が二人ついてきてくれた。

「こっち」

男衆四人を引き連れ、マシバは急いで道を取って返した。

サイはマシバの領巾(ひれ)で行き倒れびと（胸がないので男だろう）の顔をぐるぐると巻いていた。きれいな鼻筋と鼻穴しか見えない状態だ。これには駆けつけた男達も不審そうに顔をしかめた。だがサイに急かされ、渋々と行動に移った。持ってきた木板の担架に男を載せる。それを二人がかりで持ち上げ、土手を登り、郷へと運んだ。

中庭には一族の先祖を祭る祠と集会堂、客間、家畜舎、井戸、いくつかの店舗が入る円形の別棟があり、その中のひとつに、『甘味茶屋パンダタ』がある。

「奥に運んでください」

サイの指示で男は『甘味茶屋パンダタ』に担ぎ込まれた。

店の軒先にはぷっくりした花蕾のような行燈、営業中ではないので、のれんは下げられていた。からから音を立てる横開きの扉より入る。店内はこじんまりとしていて、手前に四人掛けの長椅子が二台、十の茶卓席と六席のカウンター、奥に厨房と板の間があった。

板の間は主にサイがぐうたらするための休憩用の小部屋で、狭いながらも、ひとがひとり寝起きするくらいの余裕はあった。そこに寝具を敷き、男を横たわらせ、待機していた医者に診せるためサイを除いて他は全員退出させられた。

店の前には既に騒ぎを聞きつけた女衆や野次馬が集まってぺちゃくちゃしていた。マシバは質問攻めにあったがそもそもなにも見ていないので答えようもない。

じりじりと時間は過ぎていく。マシバはじっとしていられず、店の前を何度もうろうろと往復していた。

「おはよう、マシバちゃん」

後ろからぎゅっと抱きつかれた。首に巻きつく腕と甘くかすれた声は常連客のものだ。

「おはよう、シュリちゃん」

背の高い美人がいた。朝っぱらからばっちり化粧済みで、髪もきれいに結っている。印象的な三白眼に細い鼻筋、薄い頬、紅い唇、美肌でシミひとつない。

シュリがマシバの耳元で呟く。息が耳にかかってくすぐったい。

「騒々しいけど、なにかあったの？」

「うん、ちょっと。シュリちゃん、よく中に入って来られたね。郷の門、閉じているのに」

基本、郷には身内以外の者の立ち入りは禁止だ。だが身元を保証する通行証があれば出入りを許可される。この場合、万が一問題が起こった場合は保証人の責任が問われるため、通行証の発行は各家で厳重に管理されている。

シュリはマシバの父の印が捺された通行証を持っていた。

そしてなにか不測の事態や突発的な事件が起こればすぐに門は封鎖される。例えば、素性の知れない第三者がいる場合だ。

「お腹が空いちゃって。今日はちょっと早めに来て、表で門が開くのを待っていたの」

「ごめんね、今日はお店、臨時休業です」

「えええっ。なんで？」

「サイちゃんが取り込み中だから」

凄まじい第六感がはたらいたのか、シュリがぴん、となにかを察した顔で訊ねてきた。

「……まさか、男絡み？」

マシバはぎくりとした。
シュリの眼に危険な光が点り、不意に顔つきが変わった。
「……俺ってものがありながら、サイの奴、男を連れ込んだわけ？」
言うなり、シュリはマシバを解放し、脇に退かせた。顎を引き、ぱきぱきと指を鳴らす。その形相は険しく、眼がすっかり据わっている。
そしていきなり扉を蹴破ろうとしたので、マシバは仰天しシュリの背に飛びついた。
「だめ！」
シュリは、普段は女装趣味の愛想のいいオネエサンだが、サイのことになるとひとが変わり、ちょっと怖いオニイサンになる。こうなってしまったシュリを止められるのはサイか兄のトオゴぐらいのもので、マシバではどうにもできない。
そしてシュリの腕が立つのは周知の事実なので、他に誰も止めようとしない。成り行きを面白がり、煽る者すらいる。
案の定、シュリは言うことを聞いてくれない。シュリのしなやかな右足がふっと浮いて膝が曲がった。マシバが惨事を覚悟した瞬間、がらっと店の扉が開いた。
「うるさい。騒ぐな、怪我人がいるんだ」
店の前にたむろしていた皆が一斉に口を噤む。静かになるとサイの表情がやや和らぎ、シュリのぴた、と宙に止まったままの足に視線が向けられた。

「シュリ、その足は？　まさか蹴破ろうとしていたわけじゃないだろうな」

サイのきつい口調にシュリが慌てて姿勢を正した。

「そ、そんな乱暴なことしないわよ。アタシ、おしとやかな男の子だもの」

マシバは抗議の眼つきでシュリを見た。シュリはあくまでもしれっとしている。

サイは疑わず頷くと、手の甲でトン、とシュリの肩の付け根を衝いて言った。

「……お腹が空いているんだろう？　少し待てるなら、店は開けないがなにか作ってやるけど、どうする？」

「待ちます、待ちます」

借りてきた猫のように従順なシュリはどこからどうみてもサイにのぼせきっていて、マシバはちょっと面白くない。

拗ねた気持ちで膨れっ面をしているところへ、ほどなく一族お抱えの医者が蒼褪めた様子で出てきた。

「ありがとうございました」

サイが丁寧に腰を折り一礼する。なんとなくマシバもこれに倣った。医者は難しい顔でサイに一言二言声をかけてやり取りを交わしたのち、帰っていった。

サイは店の前に集まった皆に「ご心配をおかけしました」と告げた。身元は定かではないけれど『罪人』ではないことを医者と二人で確認したと言った。眼が醒め次第、事情を聴き、郷の長に説明に

参上すると約束し、解散させる。

「マシバだけ、おいで」

手招きされ、マシバは嬉々としてサイの胸の前を通り店に入った。そこらへんでごろごろしていたパンダタも遅れまいとして、ひょこん、と跳ねるように滑り込む。サイはつまみ出さない。なんといっても、パンダタは店の『顔』なのだ。

シュリや護衛士、他にも何人かが入りたそうにしていたが、サイは許さなかった。

店舗の中は薄暗い。扉に頑丈な錠を下ろすと、サイがマシバをじっと見つめて言った。

「頼みたいことがあるんだ」

一　郷の中（後書き）

お待たせ？　いたしました。
予定より3日遅れの参上です。
次話、運び込まれた『彼』が眼を覚まします。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

二　宣誓印（カムラ・ダエ）（前書き）

残念、まだ『彼』は眠ったままです。

二　宣誓印（カムラ・ダエ）

「うん」

こっくりとマシバは頷いた。

「まだなにも説明していないけど？」

「いいの。サイちゃんのお願いならなんでもきく。なにをすればいいの？」

サイがカウンターの椅子に手をかけ、体重をちょっと載せる。

「マシバだけ中に入れた理由、わかる？」

「ううん」

「私が君を信用しているからさ」

「マシバもサイちゃん信じてるよ！　だってだって大好きなんだもん！」

拳を握り、熱を込めてマシバが力説すると、サイは「知ってる」と微苦笑して頷いた。

「ありがとう。じゃ、来て。こっち」

店と厨房を仕切る藍色ののれんを揺らして、奥へ行く。

通路は狭い。狭いのに重石を載せた大小の樽や瓶詰が並び、麻紐編みの箱が雑に積まれている。突きあたりには掃除道具とその他諸々。

厨房は煙突付きのかまどと調理場、洗い場、物置き棚に分けられ、大きめの窓があり、カウンターへ抜けられる造りになっている。
厨房の向かいが板の間だったが、折りたたみ式の衝立が置かれ、それが邪魔でなにも見えない。ただ、微かに寝息だけが聞える。よく眠っているようだ。
サイは水桶から柄杓で一杯すくい、椀に注いでごくりと飲んだ。

「ふー」
「頼みごとって、なに？」

サイは手の甲で口元を拭って言った。

「彼をしばらくここに匿いたい」

彼。
やっぱり男のひとなんだ、と知ると同時にもやもやした気持ちになる。なんとなく身構えてしまう。だがマシバは口に出してはこう言った。

「『助ける』じゃなくて『匿う』なの？」
「そう」
「匿うのはいいけど……でももしもそのひとが悪いひとで、サイちゃんが傷つくようなことになったらいやだな」
「悪いひとか善いひとかはわからない。でも困っているひとなのは間違いない」
「またサイちゃんのお節介がはじまった」
「悪かったね」
「悪くないよ。そこがサイちゃんのお節介だけど、いいところだもん」
「お節介は余計」

こつん、と頭を小突かれる。マシバは「えへ」と舌を出して微笑した。
サイは首の後ろに手をあて、やや疲れた表情で衝立の向うを見やった。

「……助けてあげたいんだ。私が以前君たちに助けてもらったように、今度は私が。たぶん面倒なことになるとは思うけど、協力してくれる？」
「サイちゃんのためなら！」

マシバは元気よく二つ返事で承諾した。どん、と胸を叩く。
サイの手に頭を撫ぜられる。足元ではパンダタが自分もかまってくれと擦り寄ったり、たし、たし、と肉球のついた前足でサイの足の甲をぶって「たあたあ」主張している。

「ったく、おまえはうるさいよ」

ぶつぶつ言いながらサイがパンダタを抱き上げて揺すってやる。パンダタはご満悦だ。
マシバは笑いながら、そわそわと衝立の向うを指差した。

「顔を見てきてもいい？」
「いいよ。まだ寝ているから、静かにね」

興味半分、緊張半分。マシバはどきどきしながら近づいて、半分ほど衝立を折りたたみ、そおっと覗いた（男のひとの寝顔を盗み見なんて、ただでさえ行儀悪い）。
そこに横になっていたのは、線の細い、さらさらした黒髪の眼鼻立ちの整った若い男だった。身体の横においた掌を上に開き、少し

口をあけて、無防備に眠りを貪っている。
優しくてひとが良さそうだなあ、とほっとしたのも束の間で、はたと『それ』に気がついたときマシバの顔面から一気にざーっと血の気が引いた。

あるべきものが、ない。
このひと、まさか――

「ぎゃーっ」

マシバは天にも轟く大悲鳴を放ち、万歳をしてそのまま後ろにひっくり返った。

「こら、静かにと言ったろ」

如才なく、背後に控えていたサイに脇の下から手を差し入れられて身体を支えられる。

「さ、さ、さ、サイちゃん！　こ、こ、こ、こ、こ」
「コケコッケー？」
「それを言うなら『コケコッコー』！　じゃなくてっ。こ、こ、こ、このひと……っ」
「いい男だろう」
「うん！　すごく恰好いい！」

サイがにやにやしているのにマシバははっとして、首を振りながらサイの胸元を掴んだ。

「ちがーう！　このひと、『印（ダエ）』がない。なにもない――『白顔（ハイ・ロウ）』だよ！」

「そう、私と同じく、ね」

感情を排したサイの声にマシバは自分の失言を察して口を閉じた。

これほど騒ぎ立てても彼が眼を醒ます気配はない。よほど強く頭を打ったか、或いは一幅盛られたのだ。

サイがぐずるパンダタを床におろし、マシバに向かい諭すように言う。

「だから『匿う』だよ。これでわかった？」

マシバはこくりと頷いた。冷汗がどおっと噴き出て来る。極度の緊張のため指先からどんどん冷たくなってきた。

彼が何者かは分からない。だが只者であるはずがない。

印（ダエ）は『宣誓（カムラ）』の証し。

英霊王院の認めた英霊使い（カムザ・イズー）により与えられる、言うなれば身分証だ。大陸人ならば必ず生まれたときに個人の名前と一族の名、それに一門の家印が左眼の下から頬にかけて直線状に刻まれる。英霊（カムザ）の力による、紅い刺青だ。

たいていは歳を重ねるごとに宣誓（カムラ）の種類も増え、同じだけ印（ダエ）の数も増えていく。多くの大陸人が持つ印（ダエ）のひとつに「汝、他人を殺すなかれ」がある。この宣誓印（カムラ・ダエ）は右眼の目尻の横に浮かび上がるもので、二重円の真ん中に十字棒の印（ダエ）で、ごく一般的だ。

他にも多くの宣誓（カムラ）にまつわる印（ダエ）があるが、万が一宣誓（カムラ）を犯した場合は、紅い刺青は黒く変色する。これは大変不名誉なことで、英霊（カムザ）を重んじる大陸においては、黒い印のある者は悪くすれば一族追放、そうでなくても、忌避される対象となる。

一族の絆が物を言う大陸において、追放は身の破滅も同様、そのため宣誓（カムラ）はとても神聖なものなのだ。

その宣誓印（カムラ・ダエ）がひとつもない――

それはつまり宣誓院もしくは英霊王院に所属する高位のひと、即(すなわ)ち。

「……聖人(カナン)……？」

鼓動が昂る。頭が混乱して眩暈がしそうだ。

マシバは答えを求めるように必死のまなざしでサイを見た。

そのときだ。

表でピュウウウィィィ、と細く耳障りなほど甲高い警戒笛が何重にも響き渡った。

「なんだ！」

サイが厨房の窓に飛びつき、がらりと開けて外を窺う。さっとサイの面に緊張が奔る。

「どうしたの？」

「『赤い鳥』だ」

それだけ呟くとサイはすぐさま身を翻し、マシバの前をすり抜け、通路の突きあたりに置かれていた短い弓と十二本の矢が入った矢筒を背負って表へ飛び出して行った。

二　宣誓印（カムラ・ダエ）（後書き）

こんばんは、安芸です。
思ったより遅くなりました。すみません。
パンダの肉球はとてもかわいいと思います。笑。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

三　幼なじみ（前書き）

フジト登場、そして退場。

三　幼なじみ

パンダタが必死になってサイのすぐあとを追ったものの、とてもついて行けず、無情にも眼の前でぴしゃりと、と店の扉は閉められた。

「たあー」

パンダタは嘆きの声を響かせ、たし、たし、と前足を踏み、早く扉を開けてくれというようにマシバに催促した。

「だめ。おとなしく待っていよう？」

マシバはむずがるパンダタを腕にすくい上げて、あやしながら、片手で戸締りをした。

とりあえず、彼についていないと。眼を離した隙になにかあっても困る。

マシバが緊張と不安と、それから非日常的な出来事に遭遇した際のかすかな高揚感に動悸を速めながら踵を返そうとした矢先、突然、背後から手が伸びて口元を覆われた。

「……騒ぐなよ？」

耳元で囁かれた声ですぐに誰だかわかった。こっくり頷くと、口を軽く押さえていた掌が離れる。

「フジト」

そこにいたのはひとつ年上の幼なじみ、フジトだ。
会うたびに、背が伸びている気がする。手足や腕も逞しくなって、どんどん男っぽく、恰好よくなっていく。
フジトはマシバが物心ついたときには傍にいて、とっくに気の置けない存在なのだが、秘密主義な上、口が軽そうで堅く、真面目にふざけていて、素性もよく知れない。
一族の後ろ盾なしには平凡に生きることすら大変なのに、フジトは郷(ごう)に属していない。いつも大勢の仲間と徒党を組んで、山中を根城にふらふらしている。
時折こうして会いに来てくれるものの、昔のように四六時中は一緒にいられない。それがとても寂しいのだけれど、自分だけがそう思っているなんてなんだか癪で、ついつっけんどんな態度をとってしまう。

「なんの用?」

会えて嬉しいと素直に言えない自分がはがゆい。
マシバは飛びつきたい衝動をぐっと堪えてパンダタを抱き締め、素っ気ない口調で訊ねた。

「用がなきゃ、おまえに会いに来ちゃいけないのかよ?」

フジトは漆黒の装束を好む。左眼を黒い眼帯で覆い、衣(きぬ)も褌(はかま)も帯も履物も全部黒一色。長めの黒髪は根元でひとつに結っている。今日は手ぶらのようだ。

「そんなことないけど……」
「顔が見たかったんだ」

斜め上から見下ろす眼は優しい。
胸がどきん、とした。たちまち頬に血が昇る。
会えて嬉しいときめきがへそ曲がりな自分を押し退けるのを感じたそのときに、フジトがにやっとして続けた。
「なあ、ちょっと丸くなったんじゃねぇ？」
「丸くなってないっ」
マシバは怒り狂って反論した。
久々にやって来たかと思えばすぐこれだ。言うに事欠いて、乙女に一番言ってはならないことを言うとは口が悪いにも度が過ぎる。
パンダタを放り出して腕まくりをし、いざフジトに挑もうとしたところ、ひょいと身をかわされた。振り上げた手首を掴まれる。
「冗談だって。きれいになった。本当だぜ？」
「……ほ、本当？」
「ああ。悪い虫がついてねぇか、心配」
「もてないから大丈夫だよ」
そう答えるとフジトは一瞬呆気にとられ、まじまじとマシバの顔を眺めて一言、突きつけられる。
「鈍い奴」
なにがよ。
マシバは突っかかろうとしたが、フジトが珍しく無防備な笑顔を見せたので、みとれてなにも言えなくなってしまった。
フジトはたいがい神出鬼没だ。気がつけば近くにいて、気がつくと消えている。本人曰く、マシバには相当甘いらしいが、決して本

心を見せない、油断も隙もない、のらりくらりとした態度のどこが？　と思う。

「いつからいたの」

「おまえたちが来る前から」

フジトはしゃがんで盛んに悪戯をしかけるパンダタをかまった。パンダタは嬉しそうに撫でられるままになっている。

「心臓に悪いから、いきなり現れるの、やめてよね」

我ながらかわいくない。

でもフジトを前にすると、どうしても我を張らずにいられない。なぜか負けたくないという気持ちが先走ってしまい、刺々しい態度になってしまう。

なんでもっとかわいく接することができないんだろう？

「相変わらず、つれねぇ女」

くっとフジトが口角を吊り上げる。無邪気さと奔放さが入り混じった表情はマシバの好きな顔だ。

だがすぐに微笑を引き取って、コツン、とマシバの額を手の甲で小突く。

「ひとつ、忠告だ」

「忠告？」

「奴に深入りするのはよせ。サイを持っていかれるぞ」

マシバは怪訝そうに眉をひそめた。肌が泡立つ。

「奴って？」

「いるだろう、奥に」

フジトが親指を通路の向うへと傾ける。彼が運び込まれたときに居合わせたなら状況は把握しているだろうが、それよりももっと詳しいなにかを知っているような口ぶりだ。

「あのひとが誰か、知っているの？」

だがフジトはマシバの問いには答えず、す、と下がってひらひらと手を振った。

「じゃあな」

「待ってよ、フジト！」

「俺にかまけていていいのか？　奴が眼を醒ましたみたいだぜ？」

その指摘に、マシバは視線を奥に向けた。同時に注意をフジトに戻して身柄を引き止めようとしたときには、既に店を出て行ったあとだった。

パンダタが擦り寄ってくる。なにか口に咥えていた。

飾り紐を通した、黄玉の首飾りだ。虎の眼のように光っている。

フジトが託していったのだろう。マシバは一目で気に入った。

「……お礼くらい言わせてよ、ばか」

両手に握りしめて、フジトを想う。もっと一緒にいて欲しいのに、最近はいつもこの調子だ。今度はいつ会えるのだろう？

考えると鬱になりそうだったので、マシバは自分を諌めて首を振

った。女々しいのは性に合わない。会いたければ、会いに行けばいい。

「そうだ、そうしようっと。なにか差し入れでも作って、あ、その前にサイちゃんに相談してお休みもらわなきゃ――」

そう言えば、サイちゃんのことでなにか言われた気がする。

『サイを持っていかれるぞ』。

フジトの言葉が脳裏に甦り、途端、怖気に襲われた。慌てて彼の様子を見に向かう。

もしそんな危険人物なら、サイの傍になんて置いておけない。誰かに事情を離して引き取ってもらわないと――だが、余所者を預かる奇特な家などあるだろうか？

板の間に戻ると、彼は既に起きていて、物珍しそうに辺りを見まわしているところだった。

三　幼なじみ（後書き）

こんにちは、安芸です。

単純一途、素直でかわいいマシバもフジトにだけはちょっと勝手が違うようです。笑。

彼もようやく眼を開けた様子。

次話もお付き合い願えればさいわいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

四　出会い（前書き）

まだ彼の名前が出てきません。

四　出会い

衝立は脇へ退けられていた。
彼は布団を這い出て、寝乱れたままの恰好で狭い板の間をうろうろしていた。さっきは気がつかなかったけれど、右腕を痛めているのか、包帯が巻かれている。
マシバがすごい勢いで飛び込んでも少しも動じることなく、彼は壁に吊るされた干し果物から視線を引きはがし、眼が合うと、人懐っこい微笑を浮かべた。

「……こんばんは」

なにげない挨拶の一声に、雷に打たれたような衝撃が奔る。

――なんてすてきな声だろう！

背筋がぞくりと痺れ、一瞬、くらっとした。
初めての経験にマシバは少なからず動揺した。日々、サイやシュリ、フジトも含めて美形にも美声にも免疫があるのに、うっかりやられてしまった。彼に対して抱いたはずの危機感など一片も残らず吹っ飛んで、代わりに、甘い動悸が押し寄せた。

「……よかった、ひとがいて」

彼の声は低く、深く、柔らかく、響きは軽妙で、話し方は穏やかで感じがいい。
それに、容姿も魅力的だった。
寝姿も絵になったが、立って話している方が断然いい。白顔（ハイ・ロウ）とい

う難点はあるものの、物静かな雰囲気、繊細そうで尖ったところがなく、笑うと、男性なのに、どこかかわいらしい。
マシバはついうっとりとしてしまった。
彼はマシバの反応のなさに困ったようで、怪我をしていない手で頬を掻いた。

「……ここ、は、どこですか」

戸惑いを隠さずに、視線がさまよう。居場所を把握しようとして断念し、彼はゆっくりとマシバに眼を戻した。

「……俺、ひとを、探していて……」
「ひと探し？」
「……あなたは、似ているけど、違う。俺のじゃ、ない……」

透き通るようにきれいな黒い瞳にじっと見つめられたせいで、マシバの心臓は音を立てて軋んだ。胸に手を置き、なにも考えられない状態で、ぽーっとしてしまう。
そこへ、「たあ」と鳴いて、たし、とパンダタに足の甲を攻撃されたのを機に我に返った。

「い、いまは朝です！　『こんばんは』じゃなくて『おはよう』です」

割とどうでもいい訂正をはじめに口走って、マシバはあたふたと続けた。
彼に見とれていたことを自覚したことで、かかか、と頭に血が昇り、顔が羞恥に燃えた。

「こ、こ、ここは『郷（ごう）』の『九番』、『甘味茶屋パンダタ』です！

あ、あなたは、川辺で倒れていたところをうちのサイちゃんに助けられたんです。ぐ、具合はどうですか？　起き上がっても大丈夫なんですか？　どこか痛いところとか、ありませんか？」

動揺するあまり、マシバはたたみかけて訊ねた。

彼は眼をしばたたかせ、丁寧に包帯の巻かれた腕を擦り、痛みはそうでもないと言うように首を竦めて、いま聞かされたばかりの名を復唱した。

「……『サイ』……？」

彼の眼の奥に、一点の強い光が点った。心なしか、表情が熱っぽくなる。

それからサイが戻るまでの間、マシバは彼と当たり障りのないおしゃべりをして過ごした。

彼はあまり口数の多い方でなく、会話は間延びしていた。ゆっくりと言葉を選ぶように話し、時折、子供のように微笑する。

加えて大変な聞き上手で、真摯に耳を傾けるしぐさと、静かな相槌が、マシバの舌を普段よりもずっと滑らかにした。彼は「サイ」のことを聞きたがり、マシバは「サイちゃんのことならまかせてっ」と、胸を叩いてこれに応じた。

とはいえ、見ず知らずの人間になんでも打ち明けるほどマシバも不用心ではなく、結局のところ、サイの甘味茶屋の主人としての仕事っぷりや、好物、苦手なもの、世話焼きな性分など、周知の事実だけを並び立てた。

それでも彼は話を聞くほど嬉しそうで、朗らかに相好を崩して言った。

「……あなたは、その『サイちゃん』が本当に好きなんだ……？」

「大好きなの！」

「たあー」

図ったような間合いでパンダタが同調する。紅い舌を出して、短い尾をふりふりと振る姿はとてもかわいい。

マシバが愛おしさにかられて、パンダタをぎゅーっと抱きしめたところで、物音がした。振り返ると、やや消耗した様子のサイがのれんを潜り、片手に矢筒をぶらさげたまま姿を現した。

「サイちゃん、お疲れさま」

「ん」

マシバはサイの手から弓と矢筒を受け取った。

「『赤い鳥』は？　うまく仕留められた？」

「一羽だけ逃げられた。失態だよ。くそっ、頭にくる……他の鳥より、ひとまわり身体が小さくて、やたらとすばしこい奴だった。なにごともなければいいけどね……まあ、そういうわけで、しばらく警戒態勢三を維持することになった。無用の遠出は禁止だ」

「えーっ」

マシバは抗議の呻きをもらした。それじゃあフジトに会いに行けない。

「仕方ないだろ。ところで」

とあっさり話を括って、サイはマシバから視線を外し、彼に首を向けた。

「お客人、眼を醒まされたようでなにより。具合はどうです？　もう紹介は済みましたか？」

彼は足を崩し楽な姿勢で寛いでいたが、サイに声をかけられるとほぼ同時に美しい所作で立ち上がり、履物をひっかけ、サイの眼の前に立った。

「……見つけた」

マシバは首を傾げた。サイも同じく不審そうに眉をひそめている。

「……あなただ」

彼の左手がサイの右手の指先に触れ、反射的に手を引っこめようとしたサイだが、彼はそれを許さず、軽く握ったまま持ち上げて、そのまま額に押し当てた。

そして眼を瞑り、夢見るように優しく吐息して、マシバとサイの二人共が仰天したくらい、想像を絶するほど華やかな言葉を紡いだ。

「……俺の、花嫁」

四　出会い（後書き）

こんばんは、安芸です。

予定よりゆっくりめで進行中。
なぜだー！？
間に合わないよ、こんな調子じゃ。でも楽しい。

次話、彼の名前が明らかに。
では、また。
引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

五　朝（前書き）

彼の名前が明らかになりました。

五　朝

二

「いらっしゃいませー。あ、シュリちゃん。おはよう」

まだのれんをかけている最中に、開門と同時に現れたシュリが一番客だ。

相変わらず、とっても美人だ。

「おはよう、マシバちゃん。アタシ、お腹空いちゃったあー」

「今日の朝ごはんもおいしいよー。サイちゃん特製ゆず餅粥と蒸し野菜の温玉からめ和え、蜂蜜餡のおまんじゅう付き」

「うわー、アタシ、ゆず餅粥大好き！　サイちゃーん、おはよーう……って、え。誰」

シュリが入口で立ち竦む。一番乗りだと踏んだところへ先客がいたため怪訝そうだ。

マシバはのれんをかけ終え、シュリの強張った背をぐいぐいと押した。

「は、入って、入って！　いつもの席は空けてあるから。ね？」

カウンターの中にサイの姿はない。厨房にいるのだろう。代わりに、カウンターの一番端の席に白い磁器製の半仮面で顔を覆った若い男がいて、のんびり茶を啜っている。

シュリが無言でいつもの席、つまりカウンターのど真ん中に腰かける。

「いまお茶を持ってくるから。すぐだから。サイちゃん、お客様でーす！」

マシバは威勢よくカウンターの奥に声をかけながら、自分も通路へと引っ込んだ。

甘味茶屋パンダタの朝は早い。

水時計が六時を指すと開店だ。

このイザホ中ツ国では、時間は二十四分割される。朝、昼、夕、夜時間に区分され、季節によって誤差はあるものの、日の出が朝、日の入りが夜だ。起床はだいたい六時、朝食はそれから半刻以内が普通、七時には仕事に行く。

水時計は長方形のガラス壺で、一定時間に一定量の水滴が落ちる仕組みになっていた。壺に溜まった水量を計ることで時間を知ることができた。

郷の中庭には日時計もあったが、曇ったり雨だったりすると使えないという難点があり、住人達の多くは水時計を基盤に生活していた。

店は朝六時に開店し、八時には一旦閉店。仕込みをし、昼どきの十二時に開店、夕刻三時まで営業する（ほとんどの家庭で夕刻五時頃には夕食を囲むので、三時をまわると客足がぱったり途絶えるのだ）。

パンダタが足元にまとわりつく。「たあたあ」と朝から元気だ。

マシバがシュリに茶を勧めても、サイはまだ出てこなかった。

シュリは片手で茶器を傾けながら、険しい眼で彼を凝視している。

そこへ腕まくりをして配膳盆を手にしたサイが出てきた。

「早いな。おはよう、シュリ」

「おはよう、サイちゃん。今朝もきれいだね！」
「おまえは眼がおかしい」
「えー。そんなことないわよーう。アタシ、美に関してはうるさいんだからー」

カウンターに身を乗り出してきらきらした眼でサイを賛美し、なんとか気を惹こうとするシュリの努力はまたも報われないようだ。
サイは素っ気なく今朝の献立を口にして、

「今日も大盛りか？」
「今日は特盛りで」

大盛りを更に盛ってくれと言う要求に、サイは「ぷ」と笑って、頷いた。

「わかった、特盛りだな」

そして手にした盆をカウンター席の彼の前に置く。椀にたっぷりとよそられた餅粥からはゆずの爽やかな香りが漂い、とろりとした半熟卵を載せた蒸し野菜と、焦げ茶色の皮のふっくらした大きなまんじゅうもおいしそうだ。
彼が浅く礼をして、匙を握る。

「……いただきます」

店内に低く響いた音楽的な声にシュリが瞠目する。
彼は一口粥を口に運ぶと、びっくりしたように固まって、ゆっくりとした動作でもう一口味わうと、生まれて間もない赤ん坊さながらのあどけない微笑を浮かべた。

「……おいしい」
「よかったな。熱いから、火傷するなよ」
料理を褒められるとサイは満更でもないようで、表情が和らぐ。
マシバははらはらした。シュリの機嫌が急下降し、どす黒い嫉妬がむくむくと湧き出て来る様が見えるようだ。
案の定、サイが中に引っ込むと、先程までと打って変わった柄の悪さでシュリが彼に向き直り、口を切った。
「で、あんた誰？　名前は？　サイのなに？」
彼が自分を指しているのだと気づくまでにやや間があった。
「……俺は、アジサ」
彼が匙を休め、シュリに面と向かって名乗る。どこか集中力を欠いたぼうっとした顔は整っているだけに掴みどころがなく、感情が読めない。
おまけにひとつひとつの言動が緩慢で、それだけでもシュリの神経を逆撫でしている。
シュリのきれいに朱に塗られた爪がカウンターをコツコツ叩く。
「それで？　開門前から店にいて、サイの一番飯食って、甘やかされていますーみたいな空気はなんなわけ。『火傷するなよ』だって？　大の男に言うことか？　俺だってそんな優しい言葉をかけてもらったことはねぇのに……あー、向かっ腹立ってきたわー。事と次第に寄っちゃ、殴る蹴る埋めるの三段責めだわー」
「……サイは、俺の、妻、に、なるひと」
「……は？」

マシバは恐怖のためぎゅっと縮こまって、じりじりと二人から距離を取った。
この後の展開は火を見るよりも明らかだ。
だが空気の読めない彼――アジサは前髪をさらっと揺らし、口元を片手で押さえ、照れているためか頬を上気させて、もごもごと繰り返す。

「早く、会いたくて。だから、俺、サイを迎えに来た……」

激しい怒りがシュリの眼の中で炸裂するのを目撃したマシバは小さな悲鳴を上げてしゃがみこんだ。
もうだめだ。シュリが暴れてまた店が半壊する。
そのとき俄かに店の外が騒々しくなって、がらりと扉が開き、常連客がわいわい、どやどやと入って来た。
だが、

「邪魔だ！」

とシュリが声を上げて恫喝すると、ただごとではない剣幕に危機を察した全員が揃って踵を返し、ぴしゃりと音を立てて扉は閉められた。
しん、と静まり返る。

「……さぁて？　もう一度言ってもらおうか。サイが、誰の、なんだって……？」

シュリの腰が浮く。郷に余所者が入る場合、武器は門前で没収されるが、シュリの場合は素手で十分だ。サイを口説いた連中を陰で片っ端から潰してきたことを、マシバはよく知っている。
マシバが流血沙汰を覚悟したそのときだった。

バンッ、と物凄い音を立てて店の扉が全開した。シュリが「引っ込んでろ！」とどやしつけようとして、はっとする。
肩で息をし、呼吸も荒く、ぎらぎらと血走った眼で仁王立ちとなっているのは、天の助け。
マシバはほとんど涙目になって叫んだ。

「お兄ちゃん！」

兄、トオゴだった。

五　朝（後書き）

こんにちは、安芸です。

ようやく、第六話。
兄の登場で次回に引きます。
シュリは無事に朝ごはんにありつけるのでしょうか？　笑。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

六　妹命な兄です（前書き）

読みにくいので、短めに掲載することにしました。

六　妹命な兄です

豊かでまっすぐな黒髪を高く結いあげ、眼光鋭い眼は藍色を帯びた黒。

左頬にはいくつかの宣誓印（カムラ・ダエ）が刻まれていて、中でも特に目立つのは『軍籍』とその『地位』を示す印（ダエ）だ。

父に似た頑丈そうな顎とうっすら生やした髭、肌は陽に焼けて褐色、背は高く、いかり肩で手足は長い。軍人らしい頑健な体躯は鋼のような筋肉が盛り上がり、いかにも強そうだ。

「どーこーだーあああ」

と、地の底から湧くような声を放ち、入口に立ち塞がるトオゴは既に怒り狂っている。

まだ軍装を解いていない。

うろこ状の小鉄を紐で綴った鎧を纏い、脛あてもつけたまま、弦巻をくっつけて大刀を佩いている。兜や弓矢、矢筒がないところを見ると、一度家に寄って脱いでいる途中で飛んで来たのだろう。誰かにアジサのことを聞いたに違いない。

トオゴは血相を変えたまま、まずシュリを、ついでアジサを捉えた。喉の奥から低く太い声を引き出す。

「……俺様のかわいい、かわいい、かわいい、めちゃめちゃかわいい妹を嫁呼ばわりしたうえ、この俺に断わりもなく求婚したってくそばか野郎は、どこのどいつだ……？」

シュリは懸命にも両手を差し上げ、「自分じゃない」と首を横に振る。

トオゴはアジサを見た。

「……貴様か」

トオゴはずんずんとアジサに近づき、腕を伸ばして乱暴に引き立たせた。傲然と告げる。

「よくも俺様の留守中にサイを口説いたな……覚悟はいいか？　歯ァ、食いしばれ！」

マシバが止める間もなかった。

トオゴの拳が横脇から勢いよく突き出され、アジサの腹に吸い込まれるようにめり込む。胸倉を掴まれているので避けようにも避けられず、猛烈な一撃をくらったアジサは吐瀉してそのまま床に膝をついた。

「なんだ、手応えのない奴だな。おーい、こら、まだ気絶するなよ。もう二、三発ぶん殴ってやらねぇと、こちとら気が済まないンだよ」

「だ、だめっ。もうやめて、お兄ちゃん」

叫んで、マシバはトオゴの背に飛びついた。このままではアジサが殺されてしまう。

トオゴはマシバの存在に気がつくと途端に破顔し、にかっと歯を見せて笑い、傷痕だらけの大きな手でマシバの頭をぐしゃぐしゃと撫ぜた。

「ようマシバ、元気だったか？　相変わらず、かわいいなあー」

でれっと目尻を下げてトオゴが言う。

「サイもマシバも、俺様の妹たちは本当にきれいでかわいい！　愛くるしい！　おまけに真面目で素直で気立てがよくて優しくて明るくて働き者で、お兄ちゃんは嬉しいぞー！」

うおおおっ、と勝手に感極まって咽び泣くトオゴは、はっきり言って暑苦しい。

そこへ、サイがシュリの分の膳を用意して出てきた。

「……騒がしいと思ったら、あんたか。お帰り、トオゴ」

「サイ！」

トオゴはカウンターに片手をつくと、足を振り上げ、やすやすと飛び越えて中に入った。

重そうな装備をものともしない鮮やかな軽業にマシバは感嘆し、シュリの顔面は引き攣った。

「いきなり求婚されるなんてなぁ、かわいそうに、怖かったろう。でも、もう大丈夫だぞ。お兄ちゃんがついてる！」

ぶわっと両眼に涙を盛りながら言って、トオゴは丸太のような太い腕を広げ、サイを抱き潰そうとした。

だが、身の危険を察したサイは素早くこれを回避し、さっと逃げると、膳をひっくり返さないよう慎重にカウンターに置く。

すかっと空を掴んだトオゴはちょっとむっとしながらも、まだ諦めない。

「なんで逃げるンだよ、お兄ちゃんだぞー。久しぶりの抱擁だぞー。嬉しいだろう」

サイはぶっきらぼうに手を前に突き出して、「待った」をかける。

「嬉しくないし、迷惑だ」
「またまた、照れるなって。いやあ、ま、照れ屋なそんなところもかっわいいけどさー」

わははは、と後頭部で手を組み、大口開けて笑うトオゴは、歴戦練磨の豪傑にはとても見えない。　天下にその名を轟かせる剛の者、雷さながら暴れる姿から『雷天』と異名をとるほどだ。
武勇の誉れも高く、仁義に篤く、上官からも部下からも信頼を寄せられるトオゴだったが、自他共に認める弱みがあった。

サイとマシバ。

「妹命！」

と、口に出して憚らないトオゴは、二人に言い寄る男どもをこれまでのところ完膚なきまでに排除してきた。
おかげで十六のマシバはともかく、サイは二十一にもなってまだ嫁に行ってない。
トオゴは普段は国境警備の任にあたっているので滅多に顔を見ることもないのだが、たまにこうして帰還しては、マシバとサイを褒めまくって、撫でくりまわして、まわりの男どもを威嚇牽制しまくりつつ、力いっぱいかわいがる。
久々の再会に興奮しているのか、トオゴの熱弁は止まらない。
だがサイの声が遮った。

六　妹命な兄です（後書き）

一ヶ月ぶりの更新です。

兄トオゴ登場。暑苦しいです。

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

七　未婚の男女の同居がダメなら？（前書き）

小さいパンダが、ころころと。

七　未婚の男女の同居がダメなら？

「アジサ、どうした」

サイが床に蹲るアジサに気懸りそうな声をかけた。

頭の後ろで指を組み、あっけらかんとした口調でトオゴが言う。

「俺が挨拶がわりに一発見舞ったんだよ。だーいじょうーぶだって、死にゃあしねぇさ」

「またか」

サイは苦しそうに咳き込むアジサを介抱し、我に返ったマシバが吐瀉物を拭き清める。

「いいかげん、口より先に手が出る癖は直せ。あんたが心配しなくても私に本気になる男なんてそうそういやしない。そこの、シュリぐらいなものだ」

「いても俺が片付けるからな」

と物騒なことをぽそりと呟いたのは当のシュリだ。

トオゴは「がはは」と歯を見せて笑い、胸をドンと叩く。

「そりゃあそうだ。まあシュリぐらい腕が立つ男なら多少の眼こぼしはしてやるが、そんじょそこらの悪い虫は、容赦なく、お兄ちゃんが退治してやるからな！」

「退治せんでいい。頼むから放っておいてくれ。ますます客足が遠のくじゃないか。アジサ、立てるか？　シュリ、粥が冷めるからとっとと食え。トオゴ、あんたも食事がまだなら用意するがどうする

？　パンダタ、入り口の傍で寝そべるのはやめろ。また踏まれるぞ。マシバ、アジサの膳を椅子席に移して、それから表にいるお客にひと声かけてくれ」

「はぁい！」

マシバは元気よく返事してさっそく行動に移った。アジサとアジサの膳を椅子席へ、それから扉の前で白いお腹を上にひっくり返り、ころっ、ころっと転がってひとり遊びをしていたパンダタを抱き上げて店の隅へ連れて行く。一旦手洗いし、身嗜みを確認する。「よし」と気合を入れ直し、がらりと扉を開けた。

「お待たせしましたー。どうぞー！　いらっしゃいませー」

表では竹製の煙管（ハジ）を咥えて紫煙をくゆらせ、雑談し、たむろしていた連中が「やっとか」とどやどや入ってくる。すぐに店はなじみの顔ぶれで埋まった。八時までマシバもサイも忙しく働いた。ゆず餅粥は大好評で売り切れ、残ったのは蜂蜜餡のまんじゅうが二つだけ。

サイはひとつをマシバに、もうひとつはぱか、と半分に割った状態でパンダタにやった。

「ほら」

「たあー」

「こりゃまた太るな」

パンダタはいつもそうだが分け前をうれしそうに食べた。眼を細めて舌をちらちらさせながら夢中になって頬張る姿はとてもかわいい。サイも膝をついてパンダタを撫でている。

のれんは一度下げていた。トオゴは家に、シュリは仕事へ（表看板のない情報屋だ）。アジサは店の奥の板の間にいる。マシバとサ

イは一息ついて、お茶を啜っていた。

「ねぇサイちゃん、アジサちゃんのこと、どうするつもりなの？」

「どうって？」

「だって……家には置けないって言われたでしょ？」

昨日アジサを家に連れ帰り、両親にアジサの白顔（ハイ・ロウ）を見せて『しばらく匿いたい』とサイが告げたところ、返事は『否』だった。宣誓印（カムラ・ダエ）のないものを『家』に上げるわけにも、ましてや未婚の男女をひとつ屋根の下に住まわせるわけにはいかないときっぱり断られた。それでも『一日だけ』と言う約束で泊まりを許されたのだ。

アジサは自分のことについては頑なに沈黙を守っていて、ただ『サイに会いに来た』と繰り返した。身元の照会については英霊王院に勤める父が確認を急ぐと言って今朝も早く登院した。結果次第では、今日の夜は家族会議だ。

口のまわりを餡だらけにしたパンダタの顔を拭いてやりながらサイが答える。

「考えたんだが、未婚の男女の同居がだめなら――」

「サイちゃん、結婚する気なのっ？」

マシバの手から食べかけのまんじゅうがポロリと落ちる。すかさずパンダタが飛びついて、遠慮なくぱくつきはじめる。

「あーあ、せっかくきれいに拭いたのに」

そんなことはどうでもいい。

マシバは決死の形相でサイを揺さぶった。

「どうなのっ？　結婚するの、しないのっ？」

「落ち着け」
「落ち着いてなんていられないよ！」

そこへアジサが奥からふらりと現れた。仮面を外している。悪いことなどなにも考えていなさそうな無垢な黒い瞳がゆっくりとサイに向けられ、ぱちぱちと瞬きした。

「話し声が、聞こえて……あの、結婚、って、誰が、誰と……？」
「私とあなただよ」

七　未婚の男女の同居がダメなら？（後書き）

実はサイのようなさっぱりした女性が一番書きやすい。口調も態度もざっくばらん。多少ガラが悪くて、ちょっと意地悪。

果たしてぼんやりなアジサがサイとどうこうなるのか？

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

八　それは禁句です（前書き）

久々の更新となりました。

八　それは禁句です

「えーっ」
「マシバ、喧しい」
「だってだってだって、むぐ」

サイの手に口を塞がれる。強制的に黙らされてしまう。

「……正確には結婚はさすがにまずいだろうから、婚約だったらどうかなと思ったんだが。それだったら、あとで性格の不一致とでもなんでも理由をつけて解消できるだろう？」

婚約だってそんなに簡単なものじゃない。
婚約解消ならば尚更だ。
でもちゃんとした結婚よりはましだ、とマシバは強引にサイの手指を外して叫ぶ。

「嘘の婚約なんだよね？　あとで絶対解消するんだよね？　そうだよね？　お願い、どこにもまだお嫁になんて行っちゃやだ。サイちゃんがいないと寂しいよ」
「たあー」

絶妙の間合いでパンダタが相槌を打つ。お腹が膨れてご満悦な、にぱ、という顔を上向けて、たしたしと足踏みしている。どうも水を欲しがっているらしい。
サイはちゃんとそれも読んでいて手元に用意していたパンダタ専用の皿に水差しから水を注いでやった。

「心配するな。こんなガサツな女を嫁に欲しいなんてもの好きはいやしないよ」

そこでアジサがおっとりと名乗りを上げる。

「俺は欲しいけど……だめ？」

マシバはドキドキハラハラしながらサイを見た。だがサイの返答は簡潔だった。

「だめだ」

マシバはほっとした。だがしょんぼりしたアジサに同情する半面、警戒心がむくむく湧いた。この、ついうっかり真逆の返事をしそうになるほど罪のないつぶらな眼は一種の凶器だ。サイは間髪いれずに断ったが自分だったら流されていたかもしれないと思う。

サイはカウンターに寄りかかってアジサに訊いた。

「まあ、多少乱暴だが『婚約者』なら同居も許してもらえるだろう。あとの選択肢はあなた次第だ。あなたがどこの誰でなにが目的なのかわからんが、私の助けはいるか？　なにか困っているなら手を貸そう。匿う用意もある。お膳立てが必要ならば然るべき筋に口をきいてもらえるよう頼むこともできる。お金はあんまりないけれど、ある程度なら用立てられる。他にもなにか――私で出来ることがあれば力になろう」

水を向けられたアジサだがまるで他人事のようにぼーっとしている。

マシバはそわそわし、身の置き所のないように手を揉んでサイとアジサの顔をちらちらと窺った。

ややあってゆっくりとアジサが話しはじめる。

「……俺、の、目的は言った……俺、あなたに会いたくて、来た。あなたは俺の花嫁……だから、俺、迎えに来た。ちょっと、早いけど、放っておいたら、危ないし……」

「あのなぁ、その花嫁ってのやめてくれないか。私は当分誰にも嫁ぐつもりはない。だいたい白顔（ハイ・ロウ）同士の婚姻など宣誓院が認めるものか。それで？　結局私の助けはいるのかいらないのか」

「待って」

マシバは割り込んで言った。サイは聞き流したようだがマシバとしては聞き捨てならないことをアジサは口にした。

「サイちゃんが危ないってどういうこと？」

アジサがサイをじっと見た。

「獣が、あなたを捜している」

ぞくりとした。一瞬で氷のような冷たい恐怖が身の内を突き抜けた。マシバは反射的にサイを振り返った。

サイの前で『獣』は禁句だ。案の定サイは表情を険しくしてアジサを睨み、きつく問い詰める姿勢を取った。

「……それはどの『獣』のことだ？　あなたはなにを知っている」

アジサが口を開いたそのときだった。

急に表が騒がしくなりマシバが様子を見に行こうと扉の鍵を外したところ、引くより先に勝手に音を立てて開かれたので驚いた。

「お父さん」

マシバの父モリトオヤが立っていた。

英霊王院に勤務する者でも四位に在籍するものしか着ることを許されない赤蘇芳（あかすおう）の院礼服を着用している（衣服の色の濃さで身分がわかる）。腰帯には帯金具が付き、装飾品と小刀を下げていた。

「アジサ様はこちらにおられるか」

「い、いるけど」

アジサ『様』ってなに？　と訊ねようとして果たされなかった。

モリトオヤが背後に向かい頷いて道を開けるとそこに控えていた何人もが先を争うように焦燥感もあらわな顔で押し入って来た。

「なんだ、あなたがたは」

サイの誰何（すいか）には答えず、全員が一斉にアジサを見て叫んだ。

「アジサ様！」

そして申し合わせたように膝を折り平伏して腕を胸の前で交差する。全員が三位の真紅の院礼服だ（マシバの父よりひとつ上の位）。

「よく――よくぞご無事で」

「ご心配申し上げました」

「どうぞ速やかに院へお戻りを。皆様お待ちかねです」

マシバは父の横にいってつついた。だが父は「待ちなさい」という具合にかぶりを振って答えてくれず、事態の成り行きを凝視している。

「……どういうことだ？」

サイがアジサに静かに問いかけるも中のひとりに阻まれてしまい、ほとんど拉致されるようにアジサは身辺を一部の隙間もなく囲われて出て行った。

表には猫科で巨躯の黄色い一眼獣が六頭と銀白の毛並みの巨大な狼に似た立派な風体の獣が待機していた。辺りには生きもの特有の臭いがむっと立ち込めている。

止めかけたサイをモリトオヤが制したので、マシバも店先からただ見送る形となった。

アジサが銀白の獣の背に跨ると獣は凄まじい咆哮を放ち、空を一気に駆け上がり、あっという間に都の方角へと姿を消した。

八　それは禁句です（後書き）

おはようございます、安芸です。
マシバ父モリトオヤの登場です。
そしてあれよあれよというまに、退場。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

九　なにごとですか（前書き）

一ヶ月以上ぶりの更新です。

九　なにごとですか

三

郷は一族が集結して暮らすことから部屋は均等に分けられている。広さはすべて同じで、一階から四階まで垂直に一家族が所有する。たいていの場合は一階が厨房、二階が食糧貯蔵庫兼物置き、三階と四階が寝室兼居住区だ（だが階段は共有で各階に何箇所か設けられている。上階にいる家族に会いに行くためにはちょっと手間がかかった）。

マシバの家も三階が両親と祖父母の居室、四階がマシバとサイとトオゴの居室として使用されていた。

部屋には箪笥、道具箱、行燈、鏡、衣装掛け、虫よけの壺、天蓋から布を垂らした臥台（ベッド）が整然と配置されている。無駄な家具はひとつもない。

朝晩の食事はいつも一階の厨房で家族全員揃っていただく。食事を作るのは女性の仕事で母カヤマシノとマシバ、サイが分担して拵える。今日の献立はタケノコとひじきの炊き込みごはんと川魚の煮つけとジャガイモとキャベツのスープだ。

食卓には上座に祖父母、順に両親、帰郷中のトオゴ、サイ、マシバがついた。

そしてなぜか父モリトオヤと共に帰宅したアジサがちゃっかり同席していた。

「いただきます」

全員が声を揃え、申し合わせたように一緒に箸をつける。

アジサは匙でスープをすくい口に運ぶと「……おいしい」と顔を綻ばせた。

「よかったな」

料理を褒めればサイの相好は割と簡単に崩れる。

和気あいあいと食事の席の空気が和んだのも束の間で、一服すると、それまで終始無言を貫いていたトオゴがじろりとアジサを睨んで言った。

「で、おたく誰？」

「トオゴ、口を慎みなさい」

モリトオヤがたしなめる。

目上の者には敬意を払うのが筋で、それが両親ならば尚である。

トオゴは言い直した。

「ちゃっかりひとの家で晩飯をくらっているそこのあなたはどこのどちら様ですかねーえ？」

「トオゴ」

「俺はこれでもおとなしくしている方だと思うぜ？」

それは間違いない。

マシバは内心頷いた。あのあと、前例のない事態に郷の中は騒然となった。英霊王院の使者が一眼獣（いちがんじゅう）に跨り束になって押しかけるなど前代未聞だ。「何事があったのか」と大勢に詰め寄られてえらい目に遭った。なにせまともに説明できるほど誰ひとりとして事情を把握していない。アジサがどこの誰でなぜここにいるのか、トオゴでなくとも知りたいに決まっている。

「こちらは」

と、モリトオヤが咳払いしてちらりとアジサに視線をやりながら改めて皆に紹介した。

「次なる英霊王アジサ様だ」

空気が固まった。

このときの場の白けようは寒々しいほどだった。

母カヤマシノはのほほんと微笑み、祖父母はぽかんとし、トオゴは眼を剥き絶句、サイは平然として、当のマシバは卒倒寸前だった。

「……」

「……」

「たあー」

空気を読まないパンダタは満腹になったためご機嫌だ。サイの足元でぐるぐると自分の尻尾を追いかけて遊んでいる。

沈黙がずっしりと重い。変な汗が出てきた。

「……」

「……」

マシバはそろりと瞳孔のみ横に動かしてサイを見た。一見動揺のないように見えたものの茶壷から茶葉が溢れている。手は空中で静止したままだ。祖父母は顔色が蒼白になりつつあり、カヤマシノはなにを思ったのかむずがるパンダタを抱き上げて口を塞いでいる。トオゴは顎が外れるんじゃないかというくらい口をあんぐり開けて茫然自失の状態だ。

マシバは恐る恐る父モリトオヤに訊ねた。

「……お父さん、それ、本当のこと……？」
「ああ」
こくりと頷くモリトオヤの落ち着き払った態度にぷつりと理性が音を立てて切れる。マシバは食卓に手をついて立ち上がり冷静さを失って叫んだ。
「ど、どどどどど、どーしてっ、次代英霊王様がうちでご飯を食べているのよーう！　おかしいでしょっ？」
「おかしくてすみません……」
ぺこりとアジサが頭を下げる。
マシバは「ひっ」と悲鳴を上げて万歳した。だらだらと滝のような汗が身体中の毛穴から噴き出てくる。膝ががくがくと震え、舌はろれつが回らない。
「ち、違うんです。謝らないでください。別に私は責めているわけじゃなくて、ええと、つまりその、そそそ、そうじゃなくて、なんでなのかなあって単純に不思議で――サイちゃん、助けてー」
サイにマシバが泣きつくと、サイは落ち着け、と言うしぐさをして、
「まずお茶を飲もう」
と暢気なことを言った。
そして最初から手順をやり直した。茶壷を温め、飲杯を温め、茶葉を入れ、湯を注ぎ、蒸らし、一旦ガラス製の茶海に移してから、温められた飲杯に均等に注ぐ。

茶葉は爽やかな甘みのキンモクセイ。後味がすっきりしているので色々なお菓子とも相性抜群だ。
今日のお茶菓子はマンゴーとタロイモに黒蜜シロップをたっぷりかけたゼリーで、アジサはとてもおいしそうに完食した。

「それで、あなたが次の英霊王というのは、本当なのか？」

前置きもなくサイがアジサを見て訊ねた。訝しい思いでいっぱいだろうに、だが、黒い瞳は不思議なほど静かだ。

「それは、本当……」

サイは思慮深くしばらく黙り、事態の異常さを把握したうえで更に問い質した。

「そのやんごとなき御方が、なぜここに？」

サイの眼がきらりと光る。次第に声が低く、険しく、尖っていく。
アジサは委縮して小さくなって答えた。

「……獣から、あなたを守りに、来た。サイは、俺の、妻になるひと、だから……」

トオゴがテーブルに手をついて勢いよく立ち上がる。激昂寸前だ。
マシバがハラハラする中、アジサはぽつりと呟いた。

「俺が、あなたを守る……」

トオゴのぶっとい腕が問答無用でアジサに伸びたそのとき、モリトオヤがその腕を押さえた。漲る緊張感。恐ろしい威圧を放ってい

る。
　モリトオヤは無言でトオゴを席につかせ、家族の面々を見まわして、眼のまわるようなことを告げた。
「仔細はともかく、アジサ様はしばらく我が家に逗留なされる。これは英霊王院による決定事項だ。急なことだが、皆よろしく頼む」

九　なにごとですか（後書き）

アジサ、同居決定。
次話より物語を物語れるはず。そのはず。
シュリとフジトも出したいな。出せればいいな。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

十　喧嘩するほど仲がいい？（前書き）

久々の更新です。

腹黒いシュリとクールなサイ。

勝敗はいかに？

十　喧嘩するほど仲がいい？

「いらっしゃいませー。あ、シュリちゃん。おはよう」

朝六時の開店と同時に甘味茶屋パンダタは馴染みの顔ぶれで埋まる。

マシバは元気のいい挨拶をしながら、お茶とおしぼりを配ってまわり、サイは次から次へと膳を用意する。

シュリは今日も一番乗りで、早速いつもの席に腰かける。艶やかな髪に紅い花かんざしを挿していて、またそれがよく似合っている。

「シュリちゃん、今日もとってもきれい」

「ありがとう。マシバちゃんもかっわいいわー。あっと、もちろん、サイちゃんも！」

マシバはクスッと笑った。

シュリはなんとかサイに好かれようと一生懸命だが、容姿にこだわりのないサイは、外見を褒められてもまったく喜ばない。

「世辞はいい。今日の献立は山菜おこわと卵のスープに焼きナス味噌炒めと杏仁豆腐」

「きゃーっ。アタシ焼きナス味噌炒め大好きー！」

「飯は？　普通？　大盛り？　それとも特盛か？」

「大盛りでお願いしますっ」

「よし」

ふ、と嬉しそうにサイが微笑する。サイはたくさん食べてくれる

ひとが好きなのだ。
マシバは催促されるまま、せっせと膳を運び、狭い店の中を往復した。
パンダタは自分の分のご飯を平らげて、いつものように席から席をてくてくと渡り歩いて、「たあー」とおねだりしている。
シュリはご飯を二膳おかわりし、全部きれいに平らげると、サイの淹れた黒茶を啜った。青磁の杯に両手を添えて姿勢を正し、幸せそうに、ほうっと息を吐く。

「おいしかったあ。ごちそうさまでした！」
「どういたしまして」

食事を終え、勘定の済ませた客からどんどん店を出ていく。
サイが片づけものをしながら、シュリに声をかける。

「今日はずいぶんゆっくりじゃないか」
「たまにはサイちゃんの顔をじっくり見ないとね」
「なんだ、そりゃ」
「サイちゃんはアタシの心の滋養なの。サイちゃんの元気な顔を見ないと、アタシも元気が出ないんだ。だからサイちゃんが悩んでいればアタシも滅入っちゃうし、悲しい気持ちでいるとアタシも沈んじゃうの。だってアタシ、サイちゃん大好きだから」

傍で聞いているマシバでさえ胸にジーン、ときた。
あらゆる口説き文句を聞き流すことにかけては名人級のサイでさえ、取り繕ったところのないこの告白には心揺さぶられたようだ。
ちょっとあわてたそぶりと、戸惑いと気恥ずかしさの混在する眼がシュリを見つめる。
シュリはすっと真顔になった。女性的な気配を消して片手をついて立ち上がり、カウンターから身を乗り出す。

「俺、サイのためならなんでもするよ？」
三白眼の瞳に強い危険な光が生まれる。
シュリはカウンターの端におとなしくちょこんと座るアジサに向けて親指を傾けた。
「たとえば、目障りな野郎の始末とか」
眼が本気だ。酷薄に笑う。
既にすぐさま投擲できるように、袖口に隠した投げ矢を構えている。
「任せてくれれば一瞬で済む。俺、心が狭いから、サイの傍に俺以外の男を近づけたくないんだ。見せたくない、触らせたくない、声だって聞かせたくない。俺がサイのなにもかもを独占したい」
シュリの危機迫る態度にも物怖じせず、サイはゆっくりとかぶりを振る。
「無理だ」
「……そう言うと思った。だったら、じゃあ、頼むから、誰のことも特別扱いしないでくれ」
口惜しそうなシュリの懇願に対して、サイが意外なことを言った。
「私は……おまえのことはちょっとだけ特別に見ていたんだが」
「は？」
「だが、まあいい。誰のことも特別扱いするなと言うなら、おまえのこともただの客としてみればいいだけのことだからな。明日から

はそうしてやる」

途端に、シュリが焦った。

「ちょっ、ちょっと待ったあああ！　あのう、そのう、それって、もしかしなくても、俺ってサイに特別扱いされていたってわけ……？」

唖然とするシュリにサイがきついまなざしを向けて、「ふん」と鼻を鳴らした。

「なんだ、その疑い深い眼は。おまえにはさんざん優しくしてやっていただろうが」

「え、あれで？」

シュリの痛い失言だ。

マシバは持っていた盆で顔を隠した。せっかく途中まではいい雰囲気だったのに、全部台無しだ。

シュリとサイはだいたいいつもこんな感じで、なかなかうまくいかない。

案の定、サイは怒気もあらわにシュリの顔面をばしっ、と叩き、押し退けた。

「……言っておくが、アジサに手を出してみろ、二度と店の敷居を跨がせないからな」

「はあ？　なんでそーなるわけ？　まさか、俺よりその優男の方がいいなんてことは……」

と、ここで絶妙なパンダタの合いの手が入る。

「たあー」

たしたし、とシュリの足を踏み、にぱっと笑う。

まるで『その通りさ、男らしく諦めろよー』と語るようなひょうきんなしぐさだ。

「……」

シュリの殺気が飛ぶ。

マシバは震え上がり、すっ飛んでいって、パンダタを腕に抱えて逃げた。この命知らずな小パンダはちょくちょくこういうヘマをやらかしてくれる。

サイがシュリを真正面から見据えて、きっぱりと言った。

「おまえがどう思おうと勝手だが、アジサは家(うち)の客人だ。失礼は許さない。覚えておけ」

十　喧嘩するほど仲がいい？（後書き）

こんばんは、安芸です。
ほぼ一ヶ月ぶりの更新。お付き合いいただければ嬉しいです。

パンダはかわいい。
かわいいは正義です。笑。

引き続きよろしくお願いいたします。
安芸でした。

十一　嫌いじゃない（前書き）

またもや、一ヶ月ぶりの更新。
お待たせ？　しました。

十一　嫌いじゃない

サイに思いっきり凄まれては、シュリも敵意を収めざるを得ない。ちらっとアジサを胡散臭そうに横目に見て、渋々と口を利く。

「わかったわ……アタシはできるだけ苛めないようにする。こんなことで、サイちゃんに嫌われたくないもの。でも俺は納得したわけじゃねぇから、こいつがサイに色目を使おうものなら、徹底的にぶっ潰す。おい貴様、そこんとこ、よーく、肝に銘じておけよ」

物騒な捨て台詞を浴びせてアジサをひと睨みすると、シュリは怒り顔で出て行った。

マシバはお店が半壊しなかったことにほっとした。またシュリが大暴れするのではないかとひやひやしていたのだ。

「困った奴だ」

嘆息するサイは、それでも、嫌気がさしているふうでもない。本人は認めないが、実のところ、サイはシュリの独占欲の強さを気にいっているのだ。

それがアジサにも伝わったのか、いつまでもシュリがぴしゃりと閉めた扉を眺めている。

ややあって、手際良く片づけを進めるサイに、アジサが訊ねた。

「……サイ、は、あのひとのことが、好き……？」

「シュリのことなら、嫌いじゃない」

「俺よりも……？」

「おかしなことを訊くな。あなたのことはなにも知らないのだから、

好きも嫌いもないだろう。だからあなたも、私のことを好きだの嫌いだの妻だのなんだの、言わないでくれ」

サイがきっぱりそう告げると、アジサはしょんぼりし、悲しげな眼をした。

マシバが同情し、慰めようとしたそのときだ。

突然、ピュウウィィィ、と甲高い警戒笛が円郷中に鳴り響いた。

サイの行動は素早かった。奥に飛び込むと、すぐさま短弓と十二本の矢が入った矢筒を背負い、俊敏に外に出た。

マシバが仰天したことに、アジサがサイを追ってしまった。あわててマシバもパンダタを抱いたまま二人のあとに続く。

円郷は俄かに騒然となった。

大勢が空を見上げ、指差し、怒鳴っている。女衆は仕事を中断し家屋に避難、警戒番として居残っていた男衆はそれぞれ手に短い弓を持ち、持ち場について狙いを定めている。

「きゃっ……」

マシバは思わず悲鳴を上げた。

上空には翼に風をとらえ、ゆるく旋回する不気味な十数羽もの巨鳥。全身くまなく赤い。眼は禍々しく赤く光り、脚の鉤爪までも赤く、まっすぐに尖った長い嘴は深紅だ。屍肉を好む習性から、『死を呼ぶ鳥』と忌み嫌われている。更に特徴的なのは、偵察に使われることが多く、その眼球を通して情報を主人に届ける役割を担う点だ。

「赤い鳥め」

サイは怨嗟のこもった声で呟き、体勢を整え、ぐいっと矢をつがえる。

「放て！」

合図により、一斉に射った。

矢の雨が赤い鳥を襲い、半分ほどに的中し、ケェーッと末期の叫びを引いて墜落する。

マシバは眼を逸らした。耳も塞いだ。手を離した拍子にパンダタがぽてっと地面に転び、一目散にサイのもとへと駆けて行く。

しかしマシバは身体に矢を受け、バタバタと苦しみにのたうつ赤い鳥を眼の前にして、動けなかった。

怖い。

気味悪い。

ガタガタと震えながら後ずさり、アジサを探す。

いた。

アジサはサイのすぐ後ろに突っ立って、不自然なほど呑気な顔で、ぼーっと眺めている。

赤の鳥退治は徹底され、次々に駆逐されていく。

ようやく最後の一羽となったとき、一際高い鳴き声を上げた赤い鳥は飛来する矢の雨をかいくぐって必死の逃亡に転じた。その動きはすばしこく、誰の矢もあたらなかった。

「くそっ」

サイが毒づく。手持ちの矢が切れたのだ。

逃げられる――と誰もが思った瞬間、突如、空を切って銀白の大きな獣が現れ、その口に赤い鳥を咥えた。

そのままサイの前に颯爽と着地し、ファサッ、とふさふさした尾を身体に巻いて、獲物を地面に落とす。
利口そうな二つの眼は、だが、サイに向けられたものではなく、その背後、アジサを見つめていた。

十一　嫌いじゃない（後書き）

こんばんは、安芸です。

あー、サイが書きやすい……！

安芸は戦うひとが好きです。逃げないひとも好き。立ち向かうひとも好き。

そして、普通のひとも好き。

本話で赤い鳥の注釈がようやく入ったから、次は獣の番ですね。

更新に間が空いているにもかかわらず、お付き合いいただいてくださる皆様に感謝を込めて。ありがとうございます！

引き続きよろしくお願いいたします。

安芸でした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6496t/

まだ君は目覚めない

2012年1月14日00時45分発行